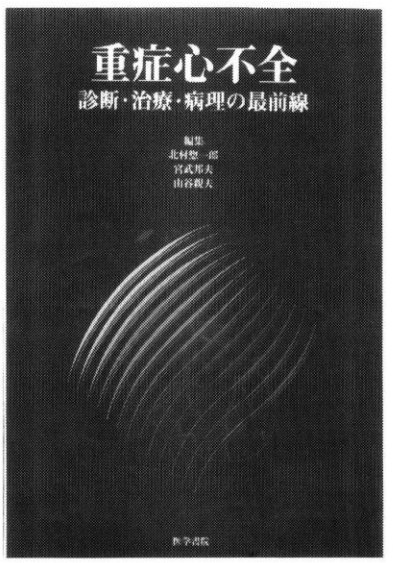
新著紹介

重症心不全
診断・治療・病理の最前線

編集　北村惣一郎，宮武邦夫，由谷親夫
医学書院，2003年1月15日発行，
B5版，288頁，定価8,000円

近年の心不全に対する治療法の目覚ましい進歩にも関わらず，慢性心不全患者の予後は，依然として不良である．欧米におけるデータによると，その5年生存率は約50%と悪性腫瘍に匹敵する．同時に，これら心不全患者の多くは頻繁に入退院を繰り返すため，これに要する医療費は膨大であり社会全体にとっても大きな問題となっている．一方，日本人の心不全患者の予後は，一般にこれに比べてはるかに良好という事実が徐々に明らかとなっているものの，いったん重症化した心不全症例を管理することが極めて難しいという点では欧米人と差はない．つまり，たとえ最先端の治療が選択され，厳重な管理がなされても，重症心不全例が心不全の急性増悪を繰り返したり，予期しない不幸な転帰に遭遇することは，循環器診療に携わる臨床家がしばしば経験することである．

本書は，国立循環器病センターに属する各部門の循環器専門医と研究者がそれぞれの専門分野から，心不全という病態の中でも「重症化した心不全」というテーマに焦点を絞って，その診断・治療・病理を解説したものである．周知のように，同センターは1999年から始まった20例あまりの心臓移植例の約半数を実施している施設であり，全国各地から末期的な重症心不全症例の紹介を積極的に受け入れ，そのための専門病棟も有している．本書の特徴は，同センターで得られたデータを最大限に駆使して，一般臨床家の日常臨床に役立つ情報を提供するという基本姿勢が強く貫かれていることである．心不全メガトライアルで得られた様々なエビデンスは全て欧米で得られたものであり，これらの知見は，欧米人とは病態・病因



等の異なる日本人の患者に必ずしもそのまま適応するものでないと考えられることから，本書は読者にとって貴重な情報源となるであろう．実のところ，この新著紹介を担当している筆者も本書の一部分を執筆しているため，この紹介には若干の躊躇も感じられたが，上記のように他書とは異なった特徴を有するものであることから，ここで紹介させて戴くこととした．

本書は，8つの章から構成されているが，以下にその内容を説明したい．

まず，第1章「重症心不全の概念」では，はじめに「重症心不全」というものがどのように定義されるかという問題点について述べ，その診断基準を提示している．

第2章「重症心不全発症の基礎疾患」では，重症

Presented by Medical*Online

心不全の発症原因となる基礎疾患を虚血性心疾患，心筋心膜疾患，二次性心疾患（特発性心筋疾患），心筋炎，弁膜症の5つに大別し，その診断から一般的な治療法が記載されている．

第3章「重症心不全の病態生理」では，重症心不全の病態生理を心筋メカニクスからの解析，体液性因子からの解析，自律神経因子からの解析，形態学的解析，分子遺伝学的解析という5つの異なった立場からそれぞれの専門家が多面的視野から解説している．

第4章では，「重症心不全の重症度診断と治療効果の判定」について，心エコー・ドプラ検査，生化学検査，放射線・心臓カテーテル検査，核医学検査，運動負荷試験，心筋生検，遺伝子検査の立場から解説されている．いずれ項目でも豊富な量の実データと画像が掲載されている点は目を引く．実際の臨床の現場における診断の際には参考となるであろう．

第5章では，「重症心不全の治療の実際」と題して，まず，一般的内科治療と特殊内科治療が記載されている．特に後者では，β遮断剤とPDE III阻害薬等の，それ程一般的ではないが，ときに使用を迫られる薬剤の使用法，さらには，ICDやECUM，PCPSについてのノウハウが詳細に記述されている．後半では，外科的治療について，補助人工心臓，Batista手術，Cardiomyopathy，心臓移植について詳細な解説がなされている．末期的な重症心不全例に遭遇した場合，いかに治療するか，どのようなタイミングで専門施設に送るかなどの判断に役立つと思われる．

第6章「合併症と対策」では，重症心不全の管理においてしばしば問題となる腎機能ならびに不整脈の問題点に取り組んでいる．

第7章「重症心不全の予後」では，特に国立循環器病センターでの拡張型心筋症についての成績が述べられている．

最後の第8章「重症心不全の病理所見」では，いくつかの病因別に，剖検所見から得られた症例呈示の形で，多彩な病理学的なカラー写真とともに解説がなされている．

本書は，『重症心不全』患者の診療に携わる一般臨床家にとって有力な情報源となるであろうと信じて疑わないが，同時に，それぞれの分担執筆者が，現在，何が問題で何を克服すべきかについての意識を常にもちながら話をすすめている感じが随所に感じられた．この点，将来，心不全診療のみならず新たな治療法の開発などの研究を志す若い先生方にも読んでもらいたいという印象を受けた．

（国立循環器病センター研究所循環動態機能部
高木　洋）

Presented by Medical*Online